

---

# 蒼い目のエドワード

山田 ライフル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼い日のエドワード

### 【Zマーク】

Z7958C

### 【作者名】

山田 ライフル

### 【あらすじ】

むかしむかし、ある所に勘吉という元気な男の子がいました。そんな勘吉の村に、奇妙なお坊様が尋ねてきます。外人坊主のエドワードと勘吉の、楽しいお話です。

(はじめに)

むかしむかし、しかしそれほど遠くはない昔。  
ある所に勘吉かんきちといつ男の子がいました。

いつも元気な勘吉は、川へ行つたり山へ行つたり。  
今日も夜明けと共に家を飛び出すと、近くの小川へ遊びにいくのでした。

さてさて、天氣もいいしもう少し遠出してよいかなど、  
きょりきょりあぜ道を歩いていると、前から背の高いお坊さんが  
いつにに向かつて歩いて来るのが見えました。

勘吉はお坊さんのが好きではあります。  
畠も耕さないくせに、家に来てはお米を持って帰るし、  
ごによじこよ訳の分からんお経を唱えて、おつかないたらありやしません。

しかし、おとうからね

「坊主はえらいんだぞ、死んだら天国へ連れてつてくれるんやから」と、

聞いていたので、見たら頭だけは下げるようにしていました。

さて、お坊さんが田の前に近づいてきました。

勘吉は、こつもの通り頭でも下げようかとお坊さんを見て、いぬと・。

なんどびっくり！

こんなに大きいお坊さんを見たことがありません。

身の丈が、勘吉の2人分以上あります。

丁度おとうに肩車をしてもらつたらこれ位になるでしょうか？

それくらい大きいお坊さんです。

大きなお坊さんは勘吉の前に来るとぴたりと止まり、話しかけてきました。

「ハーサイ、しょうねん。」このあたりイ、お寺ありますかア？」

勘吉はまたもびっくりしました。ものすごい訛りなまです。

これは、普通のお坊さんではありません。

人間ぽいですが、目の色も水色で普通ではありません。

髪の毛も金色できらきらしています。

勘吉が何も話さず見とれていると、お坊さんはまたまた話しかけてきました。

「おーウ、しきうねん、どうしましたア？お坊さん怖くないテスヨ！」

勘吉は考えました。人に似てるけどどこか違うぞ。

この風体から考えると・・・う~む・・・

天狗てんぐか？天狗じゃないか？

勘吉は、大きなお坊さんの股間をつま先で思いつきり蹴り上げました。

「ガツデム！！」

お坊さんは一声あげるとその場にへたり込んでしまいました。

## 山田 ライフル

### 第1話 大件寺の和尚さま

勘吉は自分の腰帯をほどいて、大きなお坊さんを木にくくり付けると、

集めた石を投げつけて叫びました。

「やいやい、このひょろつこい天狗め。さてはおらの村きて、  
悪さするつもりだな。白状しやがれ。」

すると大きなお坊さんは目を覚まし、

「ファック！！」

と一声上げると、帯をふりほどくとしあじめます。

「なにが、ふあっこだ。おらの村に何しに来たか言わないとおとう  
呼ぶぞ。」

勘吉が、大きなお坊さんに向かつてそう言ひと、お坊さんは  
「ノンノン！私ここに、無人の寺ある聞いてやつて来ました。  
しうねんよ、私怪しくないデース」

と怪しげな日本語でまた話しかけてきます。

「私、外人デース、南蛮人デース。

分かりますか？通じてますか？

外国人人はみんなこんなデスヨー？」

勘吉はそんな一生懸命なお坊さんの様子を見ていて、  
ふと思い出したことがあります。

それは以前、名主の加衛兵なみしさんが長崎から歸つてきたときに

「目の青い南蛮人を見た。それはそれはおおきかった、びっくりし  
た。」と

話を聞いたのを思い出したのです。

もしやと勘定は尋ねてみる事にしました。

「んー? おまえ、ひょっとして南蛮人?」

「オウ、イハツ!!」

大きなお坊さんは元気な声で答えました。

「おう、じょうねん、最初からやうござつべきでしたー。私、とある南蛮国から来ました、Hドワードこーこーます。Hドワード和尚と呼んでください。」

「Hドワード和尚! 名前そのまんまなのーー!」

「そのまんま、ダメですかー?」

「お坊さんは出家したら名前変わるっておかあ言つたけど。おーう、なにそのルール、訳わかりませーん。」

「・・・」

「おけー、カンキチ。どんな名前がいいでしょうか?」

「・・・お前やつぱお坊さんじゃねえだろ。」

「お坊さんですよ。」

勘吉はまた石を投げつけるのでした。

「フアッ!! オーファック!! なぜ石投げるですかー!!」

「正直いわねえからだ。何の目的でここに来たんだ。」

「おかげ、カンキチ。正直言いまーす。」

正直言つから、カンキチ助けて下わこよ?」

やうづひと田の蒼いお坊さんは、体勢を整え

いそいそと話し始めました。その話とは、

Hドワードは半年前に、シャンハイ上海と言つ外国で  
船に乗るお仕事をしてこました。

しかし、ある日嵐にあつてここから少し離れた浜辺へ打ち上げられてしまったのです。

日本語がわからずオロオロしていたエドワードは、偶然近くにいた漁師さんに助けられ、そこで日本語を覚えることができたのでした。

その後、その村から追い出されたエドワードは、近くのお寺へかくまつて貰っていたのですが、そこにもやがて居れなくなり、やむなく紹介されたお寺へ移動することになったのです。

そして、その旅の途中に勘吉に会い、いきなり蹴られ縛られたのでした。

「なーんだ。『めんよエドワード、悪い事したなあ。』

勘吉は頭をかきながら、エドワードにすべりつけた腰帯を解いてやりました。

「オー、カンキチ！ わかてくれて、うれしいでーす。

カンキチの村に、ダイケンジといふお寺、ありますかー？」

「ん？ 大件寺か？ よし俺についてきなー！」

勘吉とエドワードは、大件寺に向かつて歩いていきました。

勘吉が前を歩いていくと、エドワードはいきなり勘吉をすくい上げます。

「う、うわ、ちょっとエドワードーー？」

勘吉が驚いて足をバタバタさせると、エドワードは勘吉を肩車しながら言いました。

「どうでーす、景色いいでしょー！ 勘吉案内役テース。

エドワードに肩車された勘吉が前を見ると、そこには青空につばいの世界が広がっていました。

わあーーーっと勘吉は大きな声をあげました。

いつもの小川も、先の方まで見えます。  
いつもの畠も、もつともつといっぱい見えます。

勘吉は大はしゃぎしながら、エドワードと一緒に村に戻ったのでした。

## 第2話 名主の加兵衛とエドワード和尚

「あそこあそこーー。あれが大伴寺だよーー。」

肩車された勘吉が指差した方向には、古くて少し痛んだお寺がありました。

「おーう、めしーめしーーー到着テースーーー！」

エドワードは、訳の分からない言葉を言いながら陽気に笑いました。

大伴寺はずいぶん長い間お坊さんがいなかつた為、当番をつくって、村のみんなで掃除をしていました。

しかし、それでも決して綺麗とはいえないお寺でした。

お寺に入ったエドワード和尚は

「ウォッケー、カンキチ。わたし、このお寺、今から掃除しようつと思いまース。

カンキチ手伝つてくれますか？」

もちろんだよと外へ駆け出そつとした勘吉は、お寺の入り口を見飛びたりと足を止めました。

いつの間にか村中の子供たちが集まっているのです。

門の所に立っている子供たちは勘吉の姿を見つけると  
エドワードに聞こえないよう、話しかけてきました。

「おい勘吉！あのおかしなお坊さんは誰なんだ！？」

「あれはエドワード和尚様で、俺が道案内したんだぞ。」

勘吉は胸を張つて大声で叫びました。

その大きな声をきつかけに子供たちは次々に  
問い合わせ始めます。

「あのお坊さん、何で髪の毛金色なんだ？」

「あれは、神様に逢つた時にびっくりしてああなつたんだって！」

「じゃあ、何で目が青いんだ？」

「あれは、お釈迦様を見た時にびっくりしてああなつたんだって！」

「じゃあ、何でちゃんと喋れないんだよ？」

「あれは、仏様に逢つた時にびっくりして言葉忘れたんだって！」

勘吉は大きな声で、自信満々に応答していきます。

「じゃあ、なんだ？偉いお坊さんなんか！？」

「凄いぞ！お経の力で何でも吹っ飛ばせるんだって！..」

勘吉が更に大きな声でそう言つと、門に集まつた子供の一人が  
うわーっと声をあげながら逃げていきました。

それにつられてるよう、他の子供達も笑いながら逃げていきました。

た。

その様子を見てニヤニヤしてくる勘吉の後ろから、エドワードが  
話しかけます。

「カンキチ、ウソ駄田テース。皆せん驚いて逃げていきましたー。  
エドワードは逃げていく子供たちを心配そうに見ていてます。」

勘吉はそんなエドワードを見て得意そつに言いました。

「へへ、違う違うエドワード。ああ言つておいたら

噂がすぐに広がるんだよ。最初に偉いってうわさが広まつたら、見た目のおかしいエドワードでも、みんなありがたがるだろ！？ さつ掃除しようぜ、次は大人たちが押し寄せてくるぞ！」

勘吉はそのまま庭に飛び出して、外壁に立てかけてあるぼつかを取りに行きました。

エドワードはそんな勘吉を見て、

「頭いい子デース、性格悪いデスけどねー」と小さく笑いながら本堂の奥に入つていきました。

エドワードは引き返してきた勘吉に、今度は飛び蹴りをくらつていました。

勘吉とエドワードが掃除を始めてしばらくすると、最初の訪問者がやつてきました。

その男はお、勘吉ひと声をかけると、近づいてきて小さな声で話しかけ始めます。

「さつき家のガキに聞いたんだけどよ、今度偉いお坊さんが来たんだって？」

なにやら偉くなりすぎて、見た目まで神々しいって言ひじゃねえか？」

神妙そうに話してくる大人に、勘吉も神妙そうに答えます。

「そうだよ、俺も最初見たときびっくりした。」

男はへーっと一言残すと、頭に巻いた手ぬぐいを取りながら本堂の中へ入つていきました。

さほど、時間が経たないうちにまた次の村人が入つてきます。

「お、勘吉、お坊様はいるかい？」  
「奥にいるよ。」

勘吉は庭を掃除しながら答えました。

そして、また一人また一人とやつてきては、本堂に入つていきました。やがて、大伴寺の本堂には、村中の人々でじつた返しました。中に入ったものは、みな真面目な顔をしてHドワードの話に耳を傾け始めていました。

中に入れなかつたものは外から立ち見をして、なにやら「ふむう」と感心しています。中には地べたにしゃがみ込んで「南無南無」と拝みだす者までいます。

勘吉はその様子を、楽しそうに見ていました。

するとその後ろから「いらっしゃ勘吉ー」と聞こえのある声が聞こえてきました。

声の主はおとうでした。

勘吉は振り返るより早くおとうの方へ引っ張られ、腰帶をぐいっと持ち上げられました。

「わ、おとう何すんだ！？」

「何

が『何すんだ』だ。お前にそんな所で何やつてんديー！..

「べつべつに悪いことしてねえよー村はずれでやこの和尚さんに出

会つたから、

この寺まで案内したんだよ、本当だよー！」

色々と嘘うそをついて後ろめたい勘吉は、つい声が上ずつてしましました。

おとうはそんな勘吉を、冷たい目で見ています。

するとその後ろからおかあが現れていいました。  
「あなた、おつしょうさんに聞いてみたらいいじゃないですか。

勘吉、嘘うそじゃないんだつね。」

そう言つと、おかあもおとうと同じ冷たい目で勘吉を見つめます。  
勘吉は、じつやあ、嘘うそがばれるかな？思いましたが、むつりに口では引けません。

勘吉は強氣でいいました。

「うん、和尚さんに聞いてみなー。ちゃんと話してくれるから。」

勘吉はエドワードの機転にかかる」とこぼしました。

勘吉のおひでは、お寺の外からエドワードに向かって話しかけます。

「おしゃりを、おしゃりを。」この度はせがれが大変お世話になつたそうだ。

何か粗相は「やむせんでしたか？」

他の村人と話をしていたエドワードは話を止めると、一いちを振り向いて

にこやかに答えました。

「あ、カンキチの父上ですねー、カンキチグッドボーイでーす。怪しい私から村を守るため、出合った私をいきなり蹴飛ばして木にくくり付けました。

とても村思いの少年でーす。」

と答えました。

あせつた勘吉は、わーと叫ぼうとしたのですが、それより早くおとうのゲンコツが勘吉の頭に落ちてきました。

その様子を見て、満足そうなエドワードは続けます。

「おーう、のんのん。カンキチの父上どの、そう怒らないでください。カンキチは正しいと思つて私に蹴りかかったのデース。

私、そのカンキチの正義感に感心しました。もしよろしければカンキチを

お寺の手伝いに置いておきたいのですがどうでしょうか?」

勘吉がエドワードーーと叫ぼうとしたが、それより先にまたおとうが答えました。

「へえ、ぜひ置いておくんなまし。なんせ礼儀のしらねえガキなんですが失礼もあると思いますが、よろしくおたの申します。」

つとおかあと一緒に深々と頭を下げるのでした。

周りの村人が、勘吉ようぢやんと働けよとやいやいぢやかすなかで、

エドワードと勘吉は冷たい笑みを浮かべながら見つめあつてゐるのでした。

さて、日も低くなり村人も帰つた後。

薄暗くなる中、一人の男がたたまれた提灯ちようとうを片手にやつてきました。

「遅くにすいません。どなたかおられますかな?」

その声に氣付いた勘吉が、お寺の門へ顔を出してみると、そこには名主なぬしの加兵衛かへいえさんが立っていました。

加兵衛さんは勘吉を見ると、

「おー、勘吉。話しさは村人から聞いているぞ。

今日から、お寺で修行するそうだな。しっかり勉強するんだぞ。」

つとやさしく声をかけてきました。

「修行はしないです、お手伝いです。」

と勘吉は恥ずかしそうに答えました。

勘吉は突然訪れた加兵衛さんにエドワードの事をどう説明しようか悩みました。

しばらく悩んだ後、勘吉は正直に話すことになりました。

「加兵衛さん、実は和尚様はこの国の人ではないのです、南蛮人なのです。

理由は和尚様から直接聞いてください。」

そういうと、勘吉はエドワードを呼びました。

エドワードが寺の中から出でると、加兵衛さんは少し驚いた様子でいました。

「ひつや、まあ。本当に見事なほどの南蛮人でないか。

エドワード殿でしたか?なぜこの様な所におられるのです?」

すぐに南蛮人とばれてしまったエドワードは逆に少し驚いていましたが、

勘吉が割つて入つて説明します。

「エドワード、名主の加兵衛さんは長崎で南蛮の人に入つたことがあるんだ。

僕も、加兵衛さんの話を聞いていたから、エドワードが南蛮人つてわかつたんだよ。」

エドワードはそれを聞いて納得したようで加兵衛さんへ話しかけました。

「これはこれは、名主さま、良くぞお参り來ましたねー。どうぞ奥へ来てください、いろいろお話ししたい事がありマース。

」「うむう、私も色々話したいことがござりますぞ。」

と加兵衛さんは、神妙な顔をしながらお寺の中に入つていきます。

勘吉も一緒に入つていこうとするが、エドワードは

「カンキチは別の部屋でお経でもみてなさい。」

と追い出されてしましました。

子ども扱いされて、少しむかつときましたが、ここには尊敬する加兵衛さんの

前です。勘吉は素直に言つことを聞くことにしました。

さて、一人になつた勘吉はペラペラとお経の本をめくると、パタンと閉じ、

ごろんと寝つこうがつて天井を見つめっていました。

勘吉の家は、床なのでこの春先あたりでも藁座いぐらの上か藁を敷くかしないとまだ冷たくて仕方ありません。

ですがこの本堂の下は多少荒れているとはいっても、畳たたみです。

温かくて居心地がいいので、勘吉はうとうとし始めてしまいました。

それから幾いくほど経つたでしょうか、勘吉は加兵衛さんの声で目が覚めました。

それは、なにやらびっくりした様子で、勘吉の所にまで届いてきました。

す。

「なんと！！」

「そんなことが！」

「できるものか！！」

つといつも冷静な加兵衛さんは全然様子が違います。なにやら気になつた勘吉は、一人のいる奥の間まで行つてみるとしました。

忍び足で、一人のいる部屋まで歩いていきます。

なんとか二人のいる小部屋の前までたどり着こうとしたその時。いきなり障子が開き、加兵衛さんがなにやら荷物を携えて出て行く所でした。

「おお勘吉、ずいぶん長くお暇したな。今から帰るでそこまで送つてはくれまいか？」

そういうと、加兵衛さんはスタスターと廊下を歩いて行きます。

勘吉は開いた障子をしばらく見ていましたが、エドワードは部屋から出でては来ません。

仕方なく加兵衛さんの後を追つていいくと、それを確認したかのように後ろからエドワードがゆつくりと出でてくるのでした。

加兵衛さんは玄関でわらじの紐を締め、ゆつくりと立ち上がりながら、

外を眺めていました。

「今宵はちょうど晦日みそかの用よう。

次の晦日までですからな。」

そう言い残すと振り向きもせず、加兵衛さんはスタスターと暗い夜道を出て行きました。

勘吉は火の灯つた提灯を片手に、加兵衛さんの前を小走り氣味に歩いていきます。

加兵衛さんはゆっくり歩きながらいきました。

「勘吉、ワシは少しの間江戸に出る。

後の事は、大和屋やまとやの差兵衛さへいにしばらく任せ心配せずにやつとくれ。」

勘吉は加兵衛さんの顔を見て、少し心配そうに言いました。

「加兵衛さん、もしかしてエドワードのこと直訴しに行くの？」

加兵衛さんはそんな勘吉の顔を見て、笑いながらいました。

「いやいや、誰からも頼まれませんのに、そんな事はせんよ。だが、エドワードはやはり少し怪しいわな。

なに、村の為にじや村為じや。そんなに心配せんでええ。」

そういうと、加兵衛さんは大きな手で勘吉の頭をグリグリ撫でるのでした。

次の日

加兵衛さんは朝早くから、身支度をして早々に江戸に旅立つていきました。

勘吉はエドワードに尋ねます。

「昨日、加兵衛さんが晦日の用つていてたよ。数えれば丁度30日間だ。エドワード、なにがあるの？」

「気にしないでいいテース

エドワードはさらりと流してしまいました。

第3話 みんなで大宴会

エドワードが来てから3日目。

村もだいぶ落ち着きを取り戻した頃、大伴寺へ一人の若いお百姓が訪れました。

「「」めんなすつて。」

歯切れの良い声を聞いた勘吉が、玄関まで走つていくと  
そこには太郎さんが立っていました。

「あ、太郎さんこんにちは。今日はどつしたの？」

勘吉が話しかけると、太郎は面白そうに話し始めます。

「いやね、今度来たエドワード和尚のために、村で歓迎会しようつて  
話になつてんだ。

今晚日が暮れたら始める予定なんだが、、「和尚いるかい？」

太郎が話していると、勘吉の後からエドワードがゆつくつと歩いて  
きました。

「オー、こんにちは。今日はどつされました？」

「エドの歓迎会やるつて太郎さんが来たんだよ。」

勘吉が振り返つて言つとエドワードは

「カンゲイカイ？」

と聞き返しました。

「そつです。みんなエドワード和尚とゆつくり話がしたいと  
いうことになつて、今晚歓迎会をしようつて話になつたんです。  
急な話で申し訳ないですけど、和尚様れますか？」

太郎は両手で手ぬぐいを握り締めながら、エドワードの返事に耳を  
かたむけました。

エドワードは少し考え、

「分かりました。今晚うかがう事にしましょつ。」  
と笑顔で答えました。

太郎は大喜びで寺を飛び出していつたのでした。

その夜、エドワードと勘吉は村の集会場へ足を運びました。

玄関の扉をガラツと開けると、そこにはずらつと豪勢な食事が並ん

でいて

エドワードと勘吉せびつくりしました。

「うわあー、エドワードすいーー料理だーー」

「おうーーすいーーこトスネー！」

エドワードが足を踏み入れると、奥のふすまから、大和屋の差兵衛さんが顔を出します。

「これはこれはエドワード和尚。おまちしておひましたぞ。おい、みんな、和尚様だぞ！！」

その声が部屋に響くと奥の方から、どたどたとたくさんの足音が聞こえきます。

別のふすまがガラッと開き、奥から村人があふれんばかりに湧き出てきました。

「おっしょーーおっしょーーまついたよ。今日は倒れるまで呑んでつてよーー！」

とみな上機嫌です。

エドワードは

「ノンノン、私坊主ですから、酒のまないですね。」  
と断りましたが、年配の男が席に座りながら、「いやいや、昔はお坊様がお酒を御造りになつていたと聞きましたぞ。遠慮することはありますまいよ。」

つと、とつくりを持ち上げエドワードに振つて見せます。

エドワードは少し考えた後、

「ん~、では少しだけいただきますか、ヽヽヽ、ネ。」と嬉しそうに答えました。

大和屋の差兵衛さんが、エドワードを部屋の奥まで連れて行くとくるつと振り返り、

「みんな席には着いたかな？今日は和尚様の歓迎会じや。遠慮なんかしたら、バチが当たるぞたんと呑め。」

その声を皮切りにみんなで「ござー献ー」と頭を上げ、杯に酒を注ぎ始めるのでした。

そんな中、勘吉はまだ子供なのでお酒は呑めません。

エドワードの後ろで茶をすすりながら、枝豆をつづくのでした。

さて、

場も盛り上がり、皆好きなことを話しながら、手に手に酒を持って話をしています。

入口の方では、後から入ってきたおとつとおかあも、他の人からお酒を注いでもらつて

楽しそうに話をしています。

勘吉は、お酒とはそんなに楽しいものかと御膳に乗つていたお酒を少し

呑んでみましたが、全然美味しいありません。

ペッと吐きだすとおちょこを戻し、大きな声で話す大人達をさめた目で見ていました。

そのうち村の誰かが、エドワードに向かつて叫びます。

「和尚様、和尚様。そのことぶき色の髪の毛は、神様を見たからそうなつたとか？」

神様ってどんな人でしたですかー！！」

真っ赤になつたエドワードは、酒臭い息を吐きながら答えます。

「オーエス！－私ホントは神様見たことないデース。

今度見に行きますから、どこにいるか教えてください。」

と、おちょこに入つた酒をまき散らしながら応対しました。

皆が、どつと笑うとまた誰かが問いかれます。

「和尚様、和尚様、その蒼い（あおい）眼はお釈迦様を見て

そうなつたんですね？お釈迦様はどんなお姿でしたか？」

そう尋ねられたエドワードは、おちょこに酒を注ぎながら答えま

す。

「オーライエス！…おしゃかつてだれ？」

集会場はまた大きな笑い声に包まれました。

エドワードはクイックと酒を開けるとよろつきながら立ち上がり、手のひらを皆に向けて笑い声を抑えつけます。

そして、

「オーケイオーケイ、この集会を機会に皆さんへ発表しようと思います。

皆さん、よく聞いてください。 実は私、外人なんですよ。」

エドワードは神妙そうな顔をしてそう言い放ちました。

すると村人の一人が言いました。

「みんな、知ってるよ。」

会場は、また一段と大きな笑い声に包まれるのでした。

大きな笑い声の片隅で勘吉は、

（そついや加兵衛さん、みんなに南蛮人の事言ふらしてたもんなあ。

そりやばれるか。）

そんなことを思いながら、枝豆を口にはおりこむのでした。

キツネにつままれたような顔をしたのはエドワードです。  
何だか悔しそうにして、おちょこに酒を注ぐとクイックと呑みあげ  
話し出します。

「ちよつ！それだけではない『ース！』

ミーはアメリカンです！…アメリカ人ですよー！…」

エドワードはおちょこを振り回しながら続けます。

「なぜ私、ここにいると思いまスカ？はい、わかる人。」

会場はシーンと静まりました。

エドワードは満足げな顔をすると、またおちょこに酒を入れ話し出します。

「オーケイオーケイ、お教えしましょ。」

一度しかいいませんヨー、よくお聞きなさい。」

みんな、酒の手を止めるとエドワードに集中しました。

エドワードは得意げな顔をして言いました。

「今ある江戸幕府を倒して、日本を支配下におさめるのです。」

みんなは、大爆笑し再び酒の手を動かし始めたのでした。

エドワードはびっくりした顔をしながら続けます。

「ちよつちよ！待ちなさい、これ本当よ！！私達すじいんだから！すん！」  
船持つてるし、武器もすんじこんだから……。」

エドワードは酒をまき散らしながら、一生懸命話しましたが  
もう誰もエドワードの話等聞いてはいませんでした。

すねきつたエドワードはドスンとその場に座ると、一人酒を呑み  
始めるのでした。

勘吉は、そんなエドワードの後ろから声をかけます。

「エドワード、上海で働いていて遭難したって話は嘘なのかい？」  
振り向いたエドワードは、話の続きを出来るのが嬉しいらしく  
満面の笑みを浮かべながら、酒を持って勘吉のそばへ寄ってきます。  
「オーカンキチ、そうなのテス。実はここだけの話、私はアメリカ  
のスペイなのです！」

エドワードは酒臭い息を勘吉に吹きかけながら、ヒソヒソと  
大きな声で話しました。

「なに？ スパ？ なに？」

勘吉は、意味がよくわからないので聞き返します。

「オウ、スペイスペイ。私はアメリカの忍びの者なのでス。  
この国の様子を調べる為、密入国して調査しているのですー。」

エドワードはそういうふうと自分のおちよーじに酒を注ぎ、勘吉のお茶  
の入った茶碗にも

酒を注ぎました。

勘吉は茶碗を置きながらたたずねます。

「またなんで、『J』の国を取るかと思つてきましたんだい？」

Hドワードは答えます。

「我がアメリカンの為の『石炭給油基地』が欲しいのです。海を向いたこの国は、とてもいい位置にあるのです。あと、アジアの国々は文明が遅れていて弱いデスネ。だから支配しにきました。

これ、西洋諸国はみんなやつてんデスヨ。」

やうこうと、Hドワードは嬉しそうに酒を呑むのでした。

勘吉は少しムカつきを覚えましたが、今がチャンスとまた訪ねます。

「Jの国を攻めるつて一体どうやって攻めるんだよ？」

「ソレハ、我々の持ち帰つた情報を元にマシューが決める事デース。

「誰だよ。マシューって。」

「私の上司デス。もう酒呑みで困つた奴なんデスヨ。」

それは、お前だ。つと勘吉は思いましたがとめずに続けます。

「他に仲間も来てるの？」

「JでHドワードはふと我に帰りました。

「オウ、カンキチ。何言わすデスカ。ノミマスヨー！」

そつ言つとHドワードはトに置いてある茶碗を勘吉に手渡し、チンと杯を呑わせると

クイッと呑み干しました。

それにつけられた勘吉は、同じように茶碗をクイッと飲み干しました。口の中に酒の香りが広がり、我慢できず勘吉はブーッと噴き出さのでした。

その後、勘吉はベロベロになつたHドワードを大件寺まで引導す  
り帰り、

ふとんの上に放り出されると、自分は本堂の方で寝る事にしました。  
(人間酔いつと駄目になるんだな。あんな大人にはならないでおこ  
う。)

そう心に誓い、すやすやと眠りに落ちて行きました。

#### 次の日

勘吉が目を覚まし、Hドワードの様子を見に行くとHドワードは  
まだ

ふとんの上に転がっています。

「いや起きんど、庭に出て行け!」とした勘吉をHドワードが呼  
び止めました。

「カンキチ…ワタシ。昨日何かいました?」

勘吉は大きな声で言いました。

「エドがアメリカ人で、日本の現状を調査しにきたスペイツて言つ  
てた!!」

Hドワードは深いため息をつくと、片手をあげてあっち行けあ  
っち行けと

力なく振り払います。

「元気出せよ!マシューに怒られるぞー!」

そういうて、勘吉が出ていくとHドワードは布団の中でメソメソ泣  
き始めるのでした。

それからしばらぐ。

自分から正体をばらしたおつかれさんこのエドワードは、村での相談の結果、

お城に連絡をしてお達しがあるまではこの村で預かる事になりました。

勘吉はエドワードの監視役として、エドワードと一緒にこの大件寺で過ごしてこるのでした。

エドワードはそんな生活の中で村の宿やお祭りの事等を勘吉から教わりました。

勘吉はエドワードから世界の様子や船の事、西洋の様子等、色々な事を教わったのでした。

毎日の田課も決まっていきました。

昼の間にエドワードは趣味の絵を描くため、監視役の村人と一緒に筆と紙を持って

あちらこちらに向かいます。

その間、勘吉は寺の掃除と洗濯をしました。

夕方になるとエドワードが帰つてきて、夕食の支度を始めます。その間に勘吉がお風呂を沸かし、ご飯を食べてザブンとお風呂に入れば

その後、寺の中でもう寝るまで勉強?といつか雑談をするのでした。

そんなどらだらとした生活が続いていた、ある日の夜。

勘吉はエドワードにて尋ねました。

「ねえエド。エドは情報を集めた後、どうやってアメリカに帰るつもりだったの?」

エドワードは布団の中であつ伏せの状態のまま、頭だけ起こして答えます。

「んー、迎えが来る予定だつたですよ。」

「ふうん、それいつ来るの？内緒にするから教えてよ。」

「んー、それ無理ですよ。本当に。」

「そうかー、やっぱり酔つてないと教えてくんないんだね。」

皮肉っぽく勘吉が言つと、

「グッナイ。」

つと、エドワードはそのまま布団に顔を突っ込んで動かなくなりました。

勘吉もそのまま、寝入つてしまつのでした。

そんな明かりの消えた大件寺に、3つの忍び寄る影がありました。3つの影は音も無く大件寺の門を乗り越え、寺の中へと忍び込んでいきます。  
縁側を進み、エドと勘吉が眠る部屋の前に来たかと思うと、その中の一人が

障子の下に油を落とし、音も無いままするりと開けてしまいました。  
後ろに待機していた一人の男が、ひやりとした空氣と共に部屋に入り

エドワードと勘吉の枕元に立ちました。

障子に油を差した男は、そのまま動かず外の様子を伺っています。枕元に立つた男達は二人、眼を合わすと「うん」とつなぎ、そのまま音も無く

背中の刀を抜き取りました。

その刀を両手で握ろうとした瞬間。

エドワードはがばっと起き上がり、かぶっていた布団ごと枕元の男に体当たりをします。

エドワードの枕元にいた男は、布団を抱きかかえながらふらふらと後ろに下がり

そのまま、襖に倒れこんでしました。

そのまま、裸に倒れこんでしました。その音に気付いた勘吉が何事と起き上がると、畳の前には刀を握り締めた男が

エドワードの方を見ています。

勘吉は考えるより早く、その男の股間めがけて小さなビザを蹴りあげました。

「ゴシッ！」

その膝には何か固い感触がありました。何か鎧のよつな物を付けているようです。

蹴られた男は、どうでもないという風に眼でにやりと笑うと、そのまま

勘吉の首めがけて刀をなぎ振りました。

刀が勘吉に触れるよりも早くエドワードが刀の男に体当たりをします。

男は、そのままふらふらと、障子の所で見張りをしていた男に向かって行きました。

「勘吉！こっちテス！！」

エドワードは勘吉の手を握り、そのまま縁側つたに走っていました。

走りながらエドワードは言いました。

「勘吉、よく聞いてください。彼らは私の命を奪いに来たようです。私は勘吉を人質に取つてしまふので、勘吉怯えてくださいねー。」

エドワードの話を聞いた勘吉はウンとうなづくと大きな声で叫びました。

「わー、助けてー」

二人はそのまま、寺の裏庭へ向かうのでした。

裏庭には、大きなたいまつが6本、きれいに並べられ地面に突き立てありました。

「わー、エドいつの間にこんなのが用意してたんだ！？」

勘吉が驚いてみていると、エドワードはムフフと気持ち悪い笑い声を立てて

懐から小さな箱を取り出しました。

その箱は四角の筒状になつていて、親指で横を押すと中には大量の木片が入っています。

エドワードはその木片を一つまみ取り出すとショットと箱にこすり付けました。

するどい火薬の匂いと共に大きな火がぼつとつきます。

「マッチだ！それマッチでしょ！！すげえ！」

勘吉が感激しているのを無視し、エドワードは6つのたいまつに次々と火をつけていきます。

たいまつはバチバチと音を立てて弾けるように火がつきました。どうやら、たいまつにも火薬か何かが降りかけてあるようです。エドワードが6本のたいまつに火をつけ終わろうとした時、目の前から

3人の男が姿を現しました。

3人の男は、全身紺色の衣装をまとい、その左手には短めの刀を握っています。

勘吉はまたもや叫びました。

「忍びだ！忍びの者だよ！！始めて見た！すげー！」

つと勘吉が話そうとした時、その中の一人が勘吉に切りかかってきました。

そのあまりにもの素早さに勘吉は動くことができません。

勘吉の頭から鋭い刀が振り落とされました。

カインツ！

忍びの振り落とした刀は、エドワードの小さな刀によつて塞がれました。

エドワードはそのまま、勘吉の首根っこを持つて後ろに下がります。そして、その小さな刀を勘吉の首に当てながら叫びました。

「おーう、のんのん！彼は大事な人質テース。そう簡単には殺させませんよ。」

その様子を見ていた一人の忍者が笑いながら、答えました。

「殺したければ殺すがいい。われらには関係ない。」

それを聞いた一人の忍者も笑いながら、言いました。

「そうだぞ、南蛮の。二人とも仲良くあの世へ送つてやるわい。抵抗せずに刀を受ける。さほど痛みは無い。」

それを聞いたエドワードは、勘吉を離し、小さな刀を地面に落としました。

そして、諦めたようにゆっくり手を叩きながら話し始めました。

「さすが日本皇帝直属の暗殺機関ですねー、実にすばらしいです。いつか来るのは思いましたが、こんなに早く私の元に来るのは、その俊敏な行動も素晴らしいデース。しかし、アナタ方。

私の本当の正体を知つての事ですかー？

私、殺せるとお思いですかー？」

エドワードをそう言つと、人差し指をゆっくり一人の忍者に向きました。

そして、大きな声で

「アタックー！」

と叫びました。

3人の忍びは意味がわからず、刀を構え四方の警戒をします。静かな緊張感の中に、たいまつた燃える音だけが広がりました。

パチッ

パチッ

緊張感の漂う中、一人の忍びがそっとエドワードを見てみます。エドワードはきょろきょろしながら、おぐおぐしています。言つた本人が一番拳動不審です。

やがて、エドワードは忍びと田が合いました。

エドワードはおかしいね、といつよつな顔で忍びに微笑み返しました。

「ふざけやがって！」

忍びはそのまま素手のエドワードに向かつて走つて行きます。その瞬間、忍びの手からビシッといつ瞬と共に鮮血が飛び散りました。

忍びは刀を落とし、その場につづくまつてしまします。

少し遅れて遠くから何がが弾けるよつた音が聞こえてきます。

タスーン・・・

その音を聞いて残りの2人の忍びが言いました。

「種子島（鉄砲）か！？」

「貴様、仲間があるのか！？」

忍者はエドワードに刀を向けながらやつ叫びました。

エドワードは汗をぬぐいながら答えます。

「おー、イエ。

私が独りしかいないと思つて来たのでしじうが  
大きな間違いデース。

本町のところは内緒ですが、仲間いっぽいいりますよ。  
では忍びの皆さん、ここのまま帰つて、日本皇帝へお伝えください。  
オランダ商人のいう話は事実だと、ね。」

エドワードはいつに無くまじめな顔をしながら  
忍者にそつ語りかけるのでした。

忍者は、そんな話より敵の人数と鉄砲の方が気にかかるようです。  
勘吉とエドワードにばれぬ様、小声で相談をはじめました。

「ここの闇夜。これほどの命中度を持つには近くにいるはずなのだが。  
・・

「つむ、気配が無い。」

「腕を狙つならば、せめて一七間（三〇メートル）以内にはおらね  
ばならぬ。

よほどの者としか思えん。」

「つむ、ここは一旦引くか。」

「そつしょう。全滅しては元も子もない。」

そう話が決まるど、一人の忍者がエドワードに話しかけました。

「南蛮の。貴様の言葉は受け取った。

オランダ商人の話は事実と伝えればよいのだな。

しかと伝えよう。貴様も命がほしくば早く出て行くことだな。

ここにいる限り、我々はいつでも命をいただきに来るぞ。」

そつ言つと、忍者は後ろに下がり、暗闇の中に溶け込んでいきました。

手傷を負つていた忍者と、もう一人の忍者はいつの間にか姿を消していました。

たいまつのもる中、勘吉とエドワードの薄い影だけがゆらゆらと  
揺らめいていました。

## 第4話 ニッポン防衛大作戦

冷たい風が気持ちよく拭きぬける、ある明け方。

食事を終えた老中の阿部は、今まさにお城へ出勤する所でした。  
「んな、行つてくる、母のことは頼んだよ。」

阿部が手を振り上げると、後ろで正座している一人の子供達は  
いつてらっしゃいませと大きく頭を下げました。

阿部はそのまま振り向きもせず、玄関の前に待たせてある大名駕籠に  
勢いよく乗り込みます。

周りをとりまいている護衛のサムライが駕籠の扉を閉めると  
玄関にいる子供たちに頭を下げる、そのまま老中を運んでいきました。

この老中阿部氏。年は三十歳を越えたくらいでしょうか？

50歳やら70歳やらベテランの大名が渦巻く中で抜擢された  
新鋭の老中です。

老中という仕事はとても偉い仕事なので、阿部は色々とまれたりしていたのですが、  
そこは気鋭の才人、阿部。のらりくらりとかわして、仕事に勤しむ  
のでした。

そんな阿部氏についたあだ名は「八方美人」。

とにかく、老中阿部正弘はあふれる能力がありながら

なかなか認めてもらえない、何かついていない人でした。

その阿部がギッシッギッシと駕籠に揺られながら城に向かっていると、

護衛のサムライが「コンコン」と駕籠をたたいて、話しかけてきました。

「阿部様、アメリカからの間者の件でお話したい事がござります。」「ほう、どうした?」

「やはり何名かのアメリカ人が、我が国に潜入している様でござります。」

「ほう、それで?」

「はい、見つけ次第始末する様にはしていたのですが、ひとつ報告したい事が御座いましたので…」

「申せ。」

「はつ。その潜入しているアメリカ人の一人に『エドワード』と名乗るものがおり、

オランダ人の話す事は本当であるぞと伝える様、話したそうです。」

老中はビックリしたらしく、駕籠は大きくグラリと揺れました。

「本当に!/?して、そのエドワードとやらはどうした!」

「はい、なにやら高性能な鉄砲を持った者を連れているらしく、逆にこちらの忍びが

一名怪我をしております。

「エドワード一行はまだ動いていない様で…」

「でかした!!そのエドワードとやらを生け捕りにせよ。」

ただし、逃げ切られそうな時は始末してよし…」

「はっ!…」

そういうとサムライは、タタタタとあさつての方向へ走ってきました。

足音が聞こえなくなると、阿部は後ろにドカッともたれかかり、大きなため息をついていました。

「やうれ、言わんこつちやない…」

それは、数ヶ月前の事。

長崎の出島より一人の役人が、重要な話があるとわざわざ江戸、阿部の屋敷まで訪れてきたのです。

普段であれば会つことも無いのですが、阿部は当時海の防衛に関する仕事にもたずさわっていたので、『長崎＝海』の海つなぎで興味が沸き、会つことにしたのでした。

その役人は長崎から休みをいとわず飛んできたと見えて、着衣も大変よれていました。

後から客間に訪れた阿部が「着衣が乱れてあるぞ。」とたしなめると、役人は申し訳なさそうに襟を正し直すのでした。

阿部がその役人に話を聞くと、役人いわく、オランダ商館長より伝え聞いたのだが、アメリカといふ西洋の新興国が、日本と仲良くなしたがっている。

近いうちに、アメリカは新兵器を携えて、開国するよう訪れる。というものでした。

阿部は驚き、その話をいち早く当時の幕府官僚に話し相談したのですが、

「んなわきやねえだろ、来なかつたらお前責任取るのかよ?」  
と、誰もまともに取り合ってくれません。

まあ、それも確かに無理はありません。

話自体、オランダ商の一館長が言つてゐだけで、どじから情報が  
分かりませんし

信憑性はありません。

そもそも、そんな大事な話を知つてゐるのがなぜオランダ商館長  
なのでしょうか?

そう考へると、阿部もなんだか信じられなくなるのでした。

しかし。

しかしながら、もし、この話が本当の事ならば、どうでしよう?  
近いうちに本当に最新兵器を携えた兵隊が、このニッポンに来ると  
したら?

ニッポンは島国なので、大陸からの攻撃や他民族の攻撃といつも  
のを  
あまり受けたことはありません。

最後に受けた攻撃は、『蒙古襲来』500年以上前のお話です。

でも、もし仮に今、この国が外国から攻撃されるような事になれば、  
どうでしよう? 守りきれるでしょうか?

そう考えた阿部は、自分のお金を使って浪人と忍者を雇い、  
本当に大丈夫かどうか調査することにしたのでした。

そして、結果はご覧の通り。アメリカからやってきたスパイが  
ニッポンの現状を調べているのです。

阿部は、この事を他の官僚に話しましたが、今度はのらつくらつと避けられて、

まともに話を聞いてくれません。

外国から敵が来るなどと、ほかの人には到底信じられないことだつたのです。

この時から、アメリカ対阿部の小さくも大きい

『ニッポン防衛大作戦』が始まりました。

阿部は、もう幕府官僚は信用できませんし、話しても分かつて貰える様な気がしませんでしたから、自分の忍者を使ってスパイ狩りを始める事にしました。

すると、今度はエドワードを言つ鉄砲を持ったスパイまで現れ、あまつさえ

オランダ人の言つ事は本当だと、逆に仕掛けてくる始末。

もう、阿部はどうしたものかと本当に困り果ててしましました。  
「あーあ。官僚達と、もうちょっと本音で話しておくようにすりや良かったかなあ？」

阿部は人間関係の難しさを悔やみましたが、そればっかりもしていられません。

とりあえずは、エドワード。

この男をさりつて、情報を聞き出すことが先決です。  
さすれば、たとえ戦艦が攻めてこよつとも、なにかしら対応する方法が見つかるかもしれません。  
この男の情報は、こちら側に有利に働くことは間違いないはずです。

そんなことを考えてくると、駕籠はがたりと顔を立て、ゆれがぴたりと止まりました。

「御老中様、御着きになりました。」

「つむ。」

一言頃を発すると、阿部はピシリと襟を正し、肩で風を切りながら、城内へと入っていきました。

## 第5話 わよならHドワード

大伴寺の忍者騒動の次の日。

Hドワードと勘吉はいつもより、朝ごはんの用意をしていただきますと、温かいご飯を口の中に押し込んでいました。

勘吉はHドワードの監視役になつてから、いつも温かいご飯を腹いっぱい食べれる様になつたので、Hドワードが来る前から比べると

一段と大きくなっています。

そんな勘吉が、モリモリご飯を食べているとHドワードが箸を止めて、神妙な面持ちで勘吉を見つめています。

「ん、どしたのHド？ 食べないの？」

勘吉がHドワードに尋ねると、Hドワードはたくわんを箸でつつきながら

首をかしげて答えます。

「勘吉、昨晩あんな皿にあつたばかりなのに、よくそんなモリモリご飯食べれますね。あほなんですか？」

「Hドワードが、辛氣臭い顔をしながら勘吉に訊ねると、勘吉は

食べれますね。あほなんですか？」

モリモリ」「飯を食べながら答えました。

「もう！エドはいつまで忍びの者に襲われるつもりなんだよ。もう、今はいなだら？襲われないだり？」

今」「飯食つてんだから、」「飯食えつて。

それと、あほうつて言葉の使い方、間違つてる。」

エドワードを見ながらそつとうと、勘吉はまたモリモリと」「飯を食べ始めるのでした。

そんな朝の大伴寺に、突如大きな声が響き渡ります。

「エドワード和尚は」「在宅か？」

その声を聞いて、何事かとエドワードと勘吉が2人で玄関に行くと、そこには一人のサムライが立っていました。

一人のサムライはエドワードを見て、感心した様にほうつと声を上げます。

「お主がエドワード和尚で」「やれぬか？」

サムライが言つと、エドワードはそつテースと素直に答えました。すると、

「拙者、所在は明かせぬが幕府ゆかりのものであります。名を村上太兵衛、隣にいるのは原田太郎右衛門で」「やれぬ。」  
といねいな挨拶を始めます。

隣のサムライは、エドワードと目が合つとペニンと頭を下げました。

「実はエドワード殿に我が徳川幕府より非公式ながら出頭の指示書が  
来ているので」「ざる。

共に江戸までお付き合い願えぬだらうか？」

一人のサムライは仰々しくエドワードに語りかけました。

エドワードは一つ深いため息を吐いて間をあけたと、  
ポソリと一言こぼしました。

「非公式と言つ事は、この件に關してはなにも幕府は動いていないと？」

サムライは眉一つ動かさずして、答えます。

「左様、しかし決して軽々しいものでは御座いませぬ。我が命に引き換えにしましてもお連れしますぞ。」

二人の侍は落ち着きを払いながら、静かに答えました。

勘吉はそれを見て、これがサムライといつものかと、少し感心をしたのでした。

少し間をおき、エドワードがお断りしますと答えた瞬間、左側にいた

原田の手が、腰の刀へそえられます。

力チャリと音がし、刃が空を切りながら薄暗い玄関に姿を現します。

「御免！」

氣を飲み込んだ大きな声が玄関に響くと、原田は大きく刀を振りかぶりました。

エドワードは横にいた勘吉の髪をぐいっと掴むと自分の前に引つ張ります。

「あつたたた！」

勘吉は、また俺が人質役かよと内心呆れながら、怯えた様子で二人のサムライを見つめました。

忍者の時とは違い、サムライの手はぴたりと止まります。

それを見たエドワードは叫びました。

「ついにこの日がやつてきてしまつたテスね！」

私はこの村を出て行かねばなりません！！」

それは、誰に語りかける訳でもありませんでしたが、

勘吉には自分とエドワードの大きな転機になる言葉として大きく心に響きました。

村上が答えます。

「アメリカの！…お主にも「人としての道」がおありであります。その子を離して観念なさい！…引き際が肝心ですぞ…！」

エドワードは中指と親指を立てながら、大きな声で言いました。

「ファック！この辺境ジャップ共…！」

そこを空けなさい、この子殺しますよ…」

そういうと、エドワードは腰の小刀を引き抜き、勘吉の喉元に刃を当てる

首元を浅く切りつけました。

浅い傷ではありました、一筋の血が勘吉の喉元をつたいます。

二人のサムライの眼に、怒りの相が浮かびました。

勘吉にはいきなりの事で、何が起きているのが分かりません。

ただ、エドワードがいつものエドワードと違うように感じました。

「そこを開けなさい…！」

サムライは刀を鞘に納めながら、右と左に分かれました。エドワードの前に

外の光が差し込みます。

エドワードは勘吉を前にして、ゆっくりと表に出でてきます。

サムライ達の前を通り過ぎ、外へ出ようとした瞬間。右側にいた村上が

目にも止まぬ速さで刀を引き抜きました。

エドワードは勘吉の首に当っていた小刀で刀を受け止めましたが、

村上の刀は小刀を切り、そのままエドワードの肩口へ切りつけます。

勘吉はエド…！…と叫ぼうとしましたが、それより早くエドワードが

勘吉の髪を引っ張りあげそのまま表に出た為、声を出すことが出来ませんでした。

エドワードは門の前まで走りぬけ、ぐるっと振り返るとそのまま先には

左手に刀を握り締め、猛然と駆け抜けてくる村上と原田の姿がありました。

エドワードは護身の小刀を切られてしまいもう武器がありません。武器の無いエドワードが身を守るすべはただ一つ。どこか得体の知れない所からいつものひきりを伺つてゐる仲間の鉄砲を使うことです。

勘吉は思わず叫びました。

「おサムライさん！ だめだめだ、こっちに来ちゃだめだ。」

勘吉は力いっぱい叫びましたが、一人のサムライの足は止まりません。

それどころか、身を低くしてさらにスピードを上げこじりに走り抜けてきます。

エドワードは勘吉につるせないと言わんばかりに髪を引っ張りあげ、原田の方へ指をさして叫びました。

「アタック！！」

その瞬間、原田は血しぶきを上げながら、つまづいた様にその場に転げこんでしまいました。

村上は一瞬訳が分からぬようでしたが、自分の顔に飛んだ血しぶきを手で拭い

状況を理解しました。

「うわさの仲間か！…どこだ！」

村上は剣先を下ろすと、気配を感じるため肩の力をぬき、浅い呼吸を始めます。

大きくこけた原田は、左腕を押さえながらゆっくりと身を起こします。

原田の大きな腕には血がしたたり、その血は刀の方まで流れていきました。

「大丈夫か？」

村上は声だけで原田に語りかけます。

「おうよ、かすっただけじゃ。」

原田は傷を見ながら、そういいました。

エドワードはそんな二人を見ながら、大きな声で

「その刀をこちらに投げなさい」と言いました。

村上はふざけるなと田で訴えかけましたが、結局やる気のなさそ  
うに

エドワードのほうへ刀を投げるのでした。

刀はエドワードの前に落ち、それを拾い上げたエドワードはまた  
勘吉の首にあて

そのまま後ずさるのように、寺の門をぐぐりぬけ外へ出て行きました。

田のあぜ道を歩くエドワードと勘吉を先頭に、二人のサムライが  
飢えた野良犬のように

後を付けていきます。

それを見た村人は一体何事があつたのかと右へ左への大騒ぎにな  
りました。

勘吉は何も言いませんでしたが、エドワードがもうこの国を出て行  
くつもりなのだと

直感で感じるのでした。

エドワードは血のにじむ袈裟を氣にもせず、村から出でいく本道  
へ向かつて歩いていきます。

村のはずれへ着く頃には2人のサムライを先頭にした、人のかたま  
りが出来上がりっていました。

村人の視線は、始めてエドワードがここに来た時と同じように、  
皆困惑に満ちた

顔をしていました。

しかしエドワードは全く気にしない様子で村の外へと向かつて歩  
いていきます。

本道にたどり着いたエドワードが外に出ようとした時、後から勘吉を呼び止める大きな声がしました。

「勘吉！…勘吉！…」とその声は悲壮をおびています。

髪を引っ張りあげられた勘吉が何とか振り向くと、そこにはおとうとおかあが

人ごみを搔き分けながらこちらに向かってくるところでした。

「おとう、おかあ、俺は大丈夫だから安心してよ…。」

勘吉はめいっぱい叫びました。

エドワードはその声を聞いて足を止めると、冷たい目をしたままでうつと後ろを振り返りました。

エドワードの目の前には、打てば弾け飛ぶような怒りが渦を巻いています。

今エドワードは刀を離せば間違いなく皆を呑み殺されてしまつです。

勘吉は人とはこんなにも恐ろしくなるものかと、背筋に悪寒が走りました。

「頼むよ、頼むから勘吉を返しておくれよ。」

勘吉のおかあは身を乗りだしてエドワードに語りかけます。

しかし、エドワードはaimoかわらず、無表情なままでした。

それどころかその視線ははるか後ろにある大伴寺を見つめたままで、どこか心あらずな感じさえするのでした。

「おう、母上殿。私が無事に海に出来れば、勘吉は必ず返しマース。だけど今は返せません、今、私達の命は一蓮托生なのデス。」

そういうと、エドワードは袈裟をひるがえして、そのまま村を出て行きました。

おかあはその場で泣き崩れ、おとうはそんなおかあの身を案じ、肩を抱きしめて励ましたでした。

村人が同じように村から出よつとするのを、原田が止めました。村上は「頼んだぞ」と一聲残し、一人エドワードの追跡を始めたのです。

## 第6話 めずらの重み

村を後にし、エドワードと勘吉が歩いていると大きな木が見えてきました。

そこは、初めてエドワードと勘吉が出会った場所でした。

勘吉が、こんな事になつてしまつとはなあと木を見つめながら考えていると

勘吉の頭の上にパタパタと何かが落ちてきました。

襟首を持たれ前を歩かされている勘吉が見上げたその先には先程のクールなエドワードはさびにも無く、顔をくしゃくしゃにして泣いている

大男がいるだけでした。

「ソーリーソーリー、皆さんありがとうございました。ありがとうございました。

ありがとうございました。ありがとうございました。

エドワードは何度も何度もいいながら、時おり感極まつたよつこ

様に

顔をしかめると、また「ありがとうございました、ありがとうございました」

とほじめるのでした。

「エド、気にするな。俺はちゃんとわかつてゐるぞ、加兵衛さんもわかつてくれてるぞ。」

励まそうとした勘吉の言葉に、またエドワードはクーンと泣き始めるのでした。

後をつける村上は、そんなエドワードの大きな背中を見ながら、色々考えていました。「この男、何を見るつもつでこの村に来たのであります？」

どのような情報が欲しかったのだ？

村上の心は色々な事を思い浮かべましたが、今は任務を遂行すべしと

頭を振り、邪念を振り払うのでした。

勘吉は歩きながらひそひそと小さな声で語りかけました。

「エド、本当は怖い奴だったんだね、また騙されてたよ。」

「オウ、ノウノウ！！勘吉は相変わらずあほですね、よく考えてもの言いなさい。私この国に味方ほとんどないですよ、危うくなつたらこれくらいして当たり前デス……」

鼻水をすすりながら話すエドワードは、いつものエドワードに戻っていました。勘吉は続けます。

「いや、それにしてもひどいよ。村人は皆カンカンに怒つてるよ。

第一エドワード皆に紹介したの俺だし、いい迷惑だよ。」

「大丈夫デース、私勘吉を人質にしましたし、首ちょっと切つて血出して

やつたからたぶん村人も、あー勘吉のあほうは騙されたんだな、本当にあほうだなつと納得しますよ。」

「おいエド、お前も切つてやるから刀かせ」

つと勘吉は刀を奪おうとしました。

「オウ、これ奪つたら勘吉撃ち殺されますよ。」と冗談めかしながらエドワードは取られないよう、刀を振り上げ遠ざけるのでした。

その様子を後で見ている村上は気が気でありません。

何事も無い様祈りながら、ぴりぴりした様子でその光景を眺めていたのでした。

さて日もだいぶ低くなり、あたりがだいだい色に染まつたる

頃、

Hドワードと勘吉は潮の香りが漂うあたつまで歩いて来っていました。  
こじまでくれば、海はもう近くです。土も浜砂っぽいものになり  
わらじに紛れ込んできます。

勘吉はずっと心に置いていた一言をはぐか、はぐまいか悩みました。

「Hド、もう帰つかやつのかい？」

言つてしまえば、Hドワードは必ず帰ると誓つてしまつ。

その為にこじまで歩こしてきたのですから。

しかし勘吉は聞いてしまつと、絶対帰つてしまつ氣がして

聞きだす事が出来ないのでした。

Hドワードは何も言わず、海に向かつて歩いてこきます。

せぞーん

いきなり波の音が近くなり、勘吉は頭を上げて前を向きました。  
目の前には大きな大きな海が広がっています。

Hドワードは歩をゆるめることなく、マイペースで歩いていきました。

勘吉はどんどん歩くペースが落ちてこきます。  
それに気付いたHドワードは、くつと襟首を引っ張りあげ、  
話しかけました。

「んー？ 勘吉、疲れましたか？ もう少しです。  
あの松の木にボートがくつづけてあります。  
私、あれで帰りますヨ。」

勘吉が松の木に手をやると、こつわうの船が繩でくつづけてあ  
りました。

勘吉は心の中で呟きました。  
ちくしょい。

やがて、Hドワードはなわを解き、勘吉と一緒に海へ向かって引きずつていきました。

船の舳先が水辺へ降ろされた時に、勘吉は我慢できずHドワードに尋ねました。

「帰るの？このまま？あつさつといつ？」

Hドワードはボートを触りながら、振り返りもせず

「ええ、まずは待ち合わせの場所へ行き、その後吟流する予定です。

」

そう答えました。

勘吉は泣くのをじりえながら  
「やうか。気をつけろよ。」

と一言こいつと、もう後は何も話しませんでした。

Hドワードは船に乗り込み、船の上から勘吉越しに村上を見ました。

村上は20メートルほど先で、大の字に突っ立っています。

Hドワードは、村上に向かつて大きな声で叫びました。

「日本皇帝へ伝えなさい！！

我々はもう、こんな目にあつのはじりジースス！！

もう一度と来ません！！

あほたれ、あほたれ！！」

そう言いながら、中指を村上に向かつて立てると、  
村上も何も言わずに中指を立てて答えました。

Hドワードはそれを確認した後に、勘吉に話しかけます。

「勘吉、つこにお別れのときが来ましたね。

短い間でしたが、本当に楽しかったです。これで最後になりますが、  
何かありますか？」

「Hド、もう来ないの？」

「ンーッわかりません。この国には来るかもしないですが、もう

勘吉とは

会つことは無いでしょう。

次来るのは、・・・来るとすればキャプテン・マシューと一緒にと言つことになるでしょう。」

「キャプテン・マシューってどんな人なの?」

「おっさんですよ、酒呑みの。めっちゃ酒呑みます。あれは酒でやられますよ。たぶん。」

勘吉は、はははと笑いました。笑うと今までこらえていた涙が、一筋ほほにこぼれました。

それを見届けたエドワードは、勘吉の足元に刀を突き刺し、そのまま砂浜を蹴つて船を沖へと押し出しました。

船は解き放たれたように沖へ沖へとすべつていきます。

不意をつかれた勘吉は、はつと笑うのをやめ叫びました。

「エド！ エドワーッドー！」

エドワードは大きく笑つて手を振ると、そのまま沖の方を向いてオールをこぎ始めたのでした。

勘吉は、こらえきれなくなつてウーッと泣いてしまいました。追いかけようとも思いましたが、目の前にささった刀が男らしくないぞと言つていいようだ、追いかけることは出来ないでした。

やがて、後ろからやってきた村上が勘吉の肩の上に手を置きます。勘吉にとつては、村上等どうでもよかつたのですが、その村上の体から放たれた、嗅ぎ覚えのある臭いが鼻につき勘吉は泣くのをやめました。

その臭いは火薬の臭いでした。

「安心しろ。しとめてやる。」

村上はそう言つと、勘吉を掴んでいる手に力が入ります。

村上の後ろからは、火縄銃を持ったサムライが一人駆けつけてきて

勘吉の横に並びました。

「おちつけ、一発でしとめる」

「はつ」

タスキがけをした一人の男は、エドワードに銃口を向けると慎重にエドワードを狙い引き金に指をあてがいました。

エドワードは、何も気付かないままマイペースに舟を漕いでいます。

これは大変！！

勘吉が大声で知らせてやるのと息を吸い込んだその時、火縄銃の一丁がはじけるような音と共に、空高く飛びあがりました。

村上も勘吉も一人の射手も、一瞬何が起きたのか分かりません。しかしその後、遠くの方から、軽く弾ける様な聞きなれた音が響いてきました。

タスーン、

「エドの仲間だ！！」

勘吉は村上に叫びました。

「エドワードが言ってました、アメリカの持つ最新兵器です。まだ仲間がこの国に残ってるんだ！！」

4人が音のする方を見ると、そこには大きな川が流れていきました。川の向こうは松の林です。

しかし、ここまで距離はざつと50メートル。

火縄銃では到底狙える距離ではありません。

二人の射手は、まさかと冷や汗を流しました。

「あの兵器は西洋の最新兵器らしいんです。たぶんこの距離でも狙うことが可能なんだ！！」

勘吉はその技術力の高さについてい声を出していました。

しかし、村上としてはたまたものではありません。

村上は残つた火縄銃を持つ射手に早く撃つよう促しました。

その瞬間、残っていた一丁も火花を散らしながら、弾けるようこ

真横に飛んでいきました。

何も気付かないエドワードはもう、だいぶ小さくなっていました。

勘吉は心中で「せようなひ」とエドに語るのでした。

「わて、川の向こう、松の林の中では太い葉巻を吸いながら  
冷や汗を拭いている一人の男がいました。

「いやあ、よく当たつたもんだ。たいしたものだ。」

皿画自贊しながら、その最新鉄砲を片付ける男は村の名主、加兵衛さんでした。

加兵衛さんはあの夜、エドワードから頼まれこの最新鉄砲「ミーハー」と

葉巻たばこ、大金等を積まれていたのです。

「一ヶ月の約束だつたが、思つたより早く出て行つたな。」

ふかりと煙を食いながら、とぼとぼと帰つていく村上と勘吉を見つめて言いました。

「悪かつたなお侍さん。これも全て村の為にじや、村為じや。」

そう言いながら、片付けが終わつた加兵衛さんは荷物を背負いそのまま村上等の後ろをついていき、一緒に村に帰つていいくのでした。

(終わりに)

その後、勘吉は村に帰り、おとうとおかの住む家に戻りました。  
家に帰つてからしばらくしたある日、おとうは勘吉に言いました。

「やーこ（あかちゃん）が出来た。」

勘吉が出でている間に、おかのお腹には赤ちゃんが宿つていたのでした。

おとうとおかあは勘吉に、お前が寺を守つたから神様が授けてくれ

たんだと

教えてくれました。

勘吉はとても喜びました。

それから勘吉はおかあの代わりに畠に出て、一生懸命働きました。おとう程ではなかつたけど、勘吉の畠にもたくさんの野菜が実りました。

やがて勘吉にも妹ができ、家は更ににぎやかになりました。もうエドワードの事は、遠い記憶になりつつあつたのでした。

そんな時、あのサムライの村上と原田が息もきれ切れ、はかまをまくり上げて

加兵衛さんの所に走つて来ることがありました。

サムライの原田と村上は、あの事件以来、村の調査と云々でこの村の守護に関わっていたのです。

「おい、加兵衛！ 大変じや大変じや……」

二人は、加兵衛さんを見つけると息を切らしながら話し出します。

「加兵衛大変じや、外国の軍船が攻めてきおつた！

あの、エドワードのあほつ……もう来んとかぬかしあつて……どうやら我が殿はその言葉は信用して、何の対策もしてあらんのかつた

みたいなのじや……

とりあえず、お主も話しに加われ……」

加兵衛さんは村上と原田に連れて行かれてしまい、しばらく帰つて来ませんでした。

ようやく開放された加兵衛さんから話された話は、「江戸は浦賀に外国の黒船が來たらしい。でつかい船で船長は確か、ペリー提督、マシュー・ペリー提督と言つらしこや。」

それを聞いた勘吉は、エドワードの言つていた

キャプテン・マシューの話しが頭によみがえつてきました。

「キャプテン・マシューだ！」

勘吉は大きな声で言いました。

加兵衛さんも知つているようでしたが、ニヤリとしただけで

勘吉の方を振り返ることはありませんでした。

さつけのつみマッシュ　さつけのつみマッシュ

勘吉は楽しそうに歌いながら煙を耕します。

今この国でペリーが酒好きなんて知つているのは俺と加兵衛さん  
くらいだらうな。

そう思ふと勘吉は何かワクワクしてきました。

たぶん、エドワードもその船に乗つてゐることでしょう。

でももう、会おうとは思いませんでした。

今の勘吉にとつては、この村で作物を作るといつ

大切な仕事があるからです。

勘吉はあの時よりもまた一段と大人になつてゐたのでした。

一方、加兵衛さんは加兵衛さんで、暇を作つては庭先に出、  
誰にも見られないように銃を構えたりして、秘密の趣味に  
精をだしたりしてゐるのでした。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7958c/>

---

蒼い目のエドワード

2010年10月15日21時29分発行